

阿部先生の思い出

齊藤 愛

阿部先生にはじめてお会いしたのは、博士課程の面接試験会場だった。私は前日のフランス語の出来がとても悪くて、ほとんど落ちているのだからと、まったく気が進まないまま受けた面接だった。面接官の一人が阿部先生だったのだが、鋭い目でいくつかの質問をなされた。やり取りした内容は忘れてしまったが、先生の瞳が銀灰色だったこと——そんなわけではないのだが——は、窓の外の曇り空と薄暗い室内の感じとともに、ありありと印象に残っている。

どういうわけか落とされず、その後研究室の一員に加えていただき、何もかもとても楽しい日々が始まった。研究室も陽光がいっぱいに差し込む明るい場所となり、筑波大学のそっけない、取り付く島もないような建物が窓外の緑の反映でそれでも輝くような空気を帯びるようになる。その後、阿部先生には指導教官についていただくことになり、授業や打ち合わせでお目にかかる機会が増えた。あの面接の日の何かしら恐ろしいような感じは影を潜め、いつも柔らかな物腰と笑いを語尾に含んだ話され方で、丁寧に原稿のチェックをしてくださったり、研究者としての進み方を親身になって考えてくださる、むしろ人並みはずれてお優しい先生の一面が、はじめの日に受けた印象をすっかり領してしまった。

とはいえ、学問的指導は厳しく、とくに日本語の乱れには細やかに目をくばっておられ、原稿が直されたこともしばしばだった。授業の中で、日記をつけることを薦められたことがある。そのときは、正直言って日記をつけることと研究とのつながりに意外の感を受け、トルストイアンである先生は、やはり文学青年でもいらっしやると思ったくらいだった。院生というものはだいたい理論にかぶれた生煮えの食えない生き物でもあるし。しかし、あのとき先生は、文学を研究対象としてのみとらえるのではなく、総体としての文学、理論ではとらえきれないその豊かな香りのようなものを見失うなとおっしゃりたかったのではないだろうか。そもそも自分たちをこんなところ——大学で文学を学ぶなどといういささか狂気じみた選択——まで導いてきてしまったはじめの時の、あの作品との幸福な一体感。そこから身をはがし、批評する主体を確立していくことが文学を学問の対象とするというこ

となんではあるが、そのときの喪失のかなしさと、確かにあったあの、愛としか言いようのないものを忘れないでいること、先生が伝えようとなさったことはそういうことではなかっただろうか。今はそんな風に考えている。

その後指導教官が変わり、先生とお会いすることもそれほど頻繁にというわけではなくなった。それでも会うたびにいつも先生は私を励まし、力づけてくださっていた。先生にお会いすると勇気がわいたものである。しかし、先生がこの大学にほとんど創設当時からいらっしゃるという方だということをつい最近まで私は存じ上げなかった。実は、これほど驚いたことはない。先生には、長く一つの組織にいた人間がほとんど必ず身にまとっているあの一種の澱のようなもの——上昇への欲望と周囲への威圧、一言で言えば権力のオーラをまったく感じさせなかったのである。もちろん、先生が要職を歴任されていたことは言うまでもないのだ。それにもかかわらず、先生はいつも清潔で、温かな方だった。

本当に不思議でならないのだが、先生の瞳は、相変わらず私の中では銀灰色である。厳しさを底に含んだ先生の温かいまなざしに、今の私はまったく応えられていない。この身の置き所のなさは本当につらいが、まだ、ほんとうにまだ論文を待たせてくださっている先生にいつかきっとお応えしたいと思っている。ささやかながら、私もはじめの日の愛を忘れない者の一人なのだから。